

文化等に於て全く獨自の特色あるものを有するが故に、西洋の學說を利用し之に當はめて直に支那のこ
とを考察するを得ぬ所以である。しかし支那研究にも大に日本又は西洋の事物並に學說を參著すべきは
勿論である。
(講演筆記)

師道に就きて

山口 察 常

本題を詳しく申せば、「師道を論じて現代の教育に及ぶ」といふのである。今日に於ける我國の狀態は
實に盛んである。内閣統計局の調査によると、

	(學校數)	(教師數)	(生徒數)
小學	四萬一千校	廿五萬人	千一百萬人 $\frac{176}{1000}$
中學	二千六百校	四萬五千人	百四十萬人 $\frac{17}{1000}$
專問	百九十校	八千人	十一萬人 $\frac{1.7}{1000}$
大學	四十六校	五千七百人	六萬八千人 $\frac{1.1}{1000}$

斯く盛んな狀態にある學校なれど、勿論内容ともに充實してゐる所もあるが近頃程學校問題が多い事
は減多にない。先年議會に於て、

(1) 政府ハ時代ノ進運ニ鑑ミ速カニ内容ノ改善ヲ斷行スベシ。

(2) 政府ハ速カニ思想對策ヲ決議シ民心ヲ安定スベシ。

といふ決議案を可決した。然らばこの盛んなる學校教育は如何なる風にあらねばならぬかといふに、文部省の調査會によつて、どんな案が實現されるか未定であるが、私が考へるに學校教育に於ては設備などの充實も必要だが、それ以上に師道の確立が必要だと思ふ。幾多の學校騒動は師道が足らぬ故に起つて來るのではないかと思ふ。依つてかゝる點から師道に就いて述べやうと思ふ。先づ師といふ事であるが、之に四種の意あり。第一は衆多の意、第二は軍旅、第三は長官、第四は教育者。説文によると師の具體的意味を説明せずたゞ本文に、二千五百人爲師、从巾从自、自四巾衆意也、とあるがこの意味はよく分らない。で自が問題となるが、自は阜と同じであるか否か明かでない。次に師といふは或人の説に齒といふのと同じだといふ、即ち自は象形トリ(齒の形)より來たといふ。元來齒は我々の入口であり、又一本では用をなさぬ故に多數の意となる。又多くして咬み碎いて行く故に軍旅の意となる。又齒は物を咬み碎いて柔げて胃へ送る故にこれから教育者の意となるといふのである。次にこの師字が用ひられて居る經書の例をみると、周易 師卦 ䷆ 地水師で水が地中にあるのである。彖傳に 師衆也水が地中にありて用をなすと同じく、上に立つ者が衆を養ふの意に解して居る、故に多數とか養ふとかの意である。次に書經には前述の四種の意が何れにも含まれて居る。堯典に、衆多の意に、汝惟不怠統朕師とあり。軍旅の意には、群后以師畢會とか六師とか見え。長官の意には、師氏とあり。教育者の意には作之君作之師、とある。是等をみるに大體の本義は多數の意であり、それから客意が派生したもので

あらう。今茲に述べやうとするものは教育者としての師で其の他のものには觸れないであく。抑も師たるものゝ本務は如何、又之がどう變遷して來たかについて述べやうと思ふ。教育者なるものゝ内容を解釋した古い書は書經中の周官、及び周禮である。周官には三公（太保・太師・太傅）三孤あり。

而してその職分については、論道經邦、變理陰陽（三公）。貳公弘化云々（三孤）とある。この道とは所謂天地の大道で、之によつて、人物凡てのものゝ規範を示し、造化を助け程よき政治を施し君を輔ける意となるのが周官の説明である。賈誼新書の中に保傅の一篇あり。之には保者保其身體、傅者傅之德義、師者道之教訓、とあり。又周禮地官には師氏保氏とあり、師氏と保氏と相並んでゐるが師氏は三德三行を教へ、保氏は六藝六儀を教へる事になつてゐる。之に就いて柯尙遷は師氏は德行を教へる故に大學の教である。保氏は藝儀を教へる故に小學の教であると解してゐる。是に由て見ると師たるものは主として精神方面の教養を掌るものと見られる。而してこの師氏保氏は國子をのみ教へたもので、一般の地方教育に就いては、同じく大司徒の以本俗六安萬民の下、四日聯師儒とあるのがそれである。この師儒の一つのものとして解すべきか否かは問題である。郷玄は之を一つのものとして郷里に道藝を教へるものと言つてゐる。王應龍は師は主として道德、儒は六藝を教へると解して居る。而して其の教ふるものは所謂郷の三物であつて、それは六德、六行、六藝で、この中六德六行が師、六藝が儒の教ふるものものと考へることが出来る。是等の例から考へると師たるものの本務は主として精神的人格的なもので、唯記誦辭句のことを教へるが如きものでない。故に禮記學記に、記問之學、不_レ足_三以爲_二人師_一とある。思ふに師の本分は、上は天子、下は一般民人に至る迄德を修め、行を積み、その人格を作る事にあ

る。でかゝる本分をもてる師は、自らその範を垂れて自ら修めねばならぬ。随つてかゝる人格のものは自然に人の上に立ち長官となり得るのである。故に君師と稱してよいのである。君師は一つである。位あれば君であり、無ければ師である。學記に、能爲師、然後能爲長、能爲長、然後能爲君、故師也者所以學爲君也とあるのである。凡て人を導く人はやがて自分が標準となる。かくの如き人を造るのが師たるものゝ本分である。Platonが*Republic*に於て、「凡そ世を支配する人は哲人でなければならぬ」と言つたのはこの師の意と似てゐる。要するに教育とは何かといふに、程伊川の語に「君子之教人也、或引之、或拒之、或各因所虧者成之而已」といつてゐる。つまり教へるといふことはその人の個性を引き出したる、缺けたるものを補つたりして人格を完成せしむるにある。故に師たる者はそれ自ら完全でなくてはならぬ。唯物を博く識つてゐる丈では師とはなれぬ。荀子が師術有四、(中略)博習不與焉。といつてゐるのもこの意である。故に孟子は、人之患在好爲人師と述べたのである。

かくの如く師の意を解することが師字の用ひられた原意で之が後に色々と變つて行つたものであらう。孔子自身は位無かりしも、聖徳を修め以て子弟を教育した。その孔子の弟子を導く上に個人個人の特長に由て德行・故事・言語・文學の四科に分けた。この四科には輕重の差はないが強ひて言へば德行が主である。これ孔子の教育の眼目である。孔子も師といふ事について色々と述べてゐる。溫故而知新所以爲人師矣。三人行必有我師。當仁不讓於師。といふが如きこれである。孔子自身が人を教へるに熱心なりしは言ふ迄もない。

師たるものゝ子弟に對する關係は孔子と七十二弟子の如き關係に於て始めて全いと言へる。孟子も亦

師に就いて色々と戒めてゐる。假令藝能を教へるものにしても亦人格が本であることを説いたのは、孟子中に逢蒙學射於羿云々の話でよく分る。即ち孟子は殺された羿に罪ありとして春秋の例を引いてゐる。即ち藝能を習ふにもその人格を通して習ふべきであるといふ意でゐる。斯く師たるものは主として人格の達成教養が中心となつてゐるのである。かの韓退之が師説に於て「嗟乎師道之不傳也久矣」とあるが、之に對し柳宗元は今之世不聞有師と言つてゐる。して見れば唐には師道はなかつたものといへる。それは春秋戰國の世には道行はれずとも師道は存してゐたが、漢代に及んでは學風が一變し、一經專問となり師弟の關係は密接にはなつたがその間の意義は變つて來た。それでも前漢時代ではまだ人格が重んじられて居たが、後漢の頃には藝能が重視されるやうになつた。斯くして唐代に於ては愈ゝ師道はすたれた。韓退之の師説に對して柳宗元は揶揄して、

僕才能勇敢、不如韓退之、故不爲人師、（報嚴厚與書）といつて居る。何れにしても兎に角唐代には師道といふものは振はなかつた。宋代に至つて時勢が一變すると共に師道も亦再興したものと認められる。しかしそれも科擧の制が布かれるやうになつて人格達成といふ目的に副はない弊を生じた。故に朱子をして、師生相視、漠然如行路之人と歎せしめた。朱子は師道に對して、「欲革其弊、莫若一仁皇之制、擇士之有道德、可爲人師者以爲學官而久其任、使之講明道藝、以教訓其學者云々と論じて改革の必要を説いたのである。之に依つても大體當時の學風が分ると思ふ。之より元・明・清と降るに従ひ一方には宋の氣風を受け師道を相當に重んじたものもあつたが、矢張り藝能を教へる事に傾きしは止むを得ないことである。清代の夏之蓉が師説に、古之師也以道今之師也以藝 中略 人才之盛衰、由師道之得失、

天下日競於無用之藝、而欲以求古者明體達用之材、其不可得也、審矣、と述べて居るが至論といふべきである。以上によつて大體師道の變遷を説き終へた。然らば今日我々は教育者として之を如何にしたならよいかと考へるに、近頃師範學校を昇格して専門學校程度にせんとといふ案があるが、之は師道向上の上よりも相應しい施設と思ふが、之が單に學科を増したり、程度を高めたりするが如きものならば師道の振はざる事は從來と同じであると思ふ。現代日本の教育は歐米に範を採つてかなり複雑である。されば唯所定の學科にのみ逐はれて居て人格的教養については殆んど見るに足るものがない。此の點についてもつと考へる事が必要ではないか。然らば何れの點を改むべきか。師たるものゝ本來の意義を明らかにし、學校の制度組織の上に之を具體化するやうにしなければならぬ事と、又師たるものゝ資格に改善を加へ、其の人格といふことに重點を置く事等が緊要である。これが改革には本學が中心となり、學界の輿論・社會の輿論に訴へ、その實現を期するやうに努むべきだと思ふ。昔聖堂に於て輪講を課する時、その順序は人格を中心にして定めてゐたといふことである。所が今日では操行點などは第二位に置かれてゐる。一般學校に於て、各生徒の人格點といふやうなものを重視して、假令學科はよくても人格點の足らないものは、落第さすといふ規定でも設けたらよいと思ふ。人格點はどうしてつけるかといへば關係教師全體の投票できめてもよいと思ふ。この事は既に或る雜誌に發表したが、何れにしても人物に重きをおくことが必要である。而してそれには先づ教師たるものゝ人格が十分吟味されなければならぬのである。

(講演筆記)